アジア・アフリカの接点で(注1)

倉　内　史　郎

米林富男先生とアジア・アフリカ研究

まだA・A研が設けられていなかったころのことで，言ってみれば「前史」ぐらいにはなるかもしれない。最近のように学内の制度や規定が整っているわけではなく，大福帳式というか行き当たりばったりといったらよいか，その場その場で物事が処理されていた時代のことである。

当時，米林富男先生という偉い先生がおられた。社会学科の中心的な教授で，東洋大に社会学部ができたのも，ひとえに先生の力によるといってよい。学問分野は全然違うのだが川越の工学部開設に関しても，米林先生の働きが大きかったと聞いている。ことほど左様に行動範囲のひろい人物であった。

いささか些事に属するが，“社会教育学”が専門の私が一時社会学科の授業科目である“教育社会学”を受け持たされたことがある。専門領域が違うからと固辞したのだが，依頼に見えた米林先生は「どっちだって大した違いはないじゃないですか」とあっさり私の異議を無視されて，結局押しつけられてしまったのである。

この米林先生が，これからの学問研究は世界的な視野に立って進められなければならず，「東洋」大学は名称からしてもアジア研究の拠点となるべきだと，つねづね説いておられた。さらに発展の緒についたばかりのアフリカ地域に早くも目を配り，これをも包含したアジア・アフリカ研究のセンターを設けたいとの構想を口に出されていた。東洋大A・A研の発端は，こうした米林先生のアイデアにはじまるものであったと私は思っている。

“東洋大学イスラエル調査団”派遣の経緯

1958年の夏ごろ，米林先生のお世話で文学部社会学科に職を得た広畑一雄氏（後に教授）が，イスラエルで開催される“Afro-Asian Seminar on Cooperation”に参加の話をもってきた。かれの知人の社会党国際局員渡辺朗氏（後に民社党代議士）が日本からの参加者を探していて，それを聞いた米林先生がぜひ東洋大から送り出そうといわれたという。

米林先生のお考えで，文学部社会学科の若手2人と私の計3人が候補にあげられているとのことであった。私は東洋大に就任して3年目のまだ29歳，文学部（教職課程）の助教授になりたてのときであった。それにしても突然の話であったし，第一イスラエルという国がどこにあるのかも知らなかった。大戦後に生まれた新しい国だと微かに認識している程度であった。しかし，滅多にない機会，それに費用は心配しなくてもよいという。また若さゆえの好奇心と多少の無鉄砲さも混ざり合って，それほど逡巡せずに行くことを応諾した。

私から教職課程主任の龍山義亮先生には当然お話ししたが，どういう手続きをせよという指示はとくになかった。おそらく龍山先生と米林先生との間で話し合われ，大学当局の了解を得たのであろう。数日後龍山先生から，行ってよいということと，大学は費用の面倒を見ないということが念を押して伝えられた。

セミナーの期間は同年11月から59年2月までの3ヵ月。大慌てで予備知識を仕込み，予防注射も2回必要なところを1回だけで完了証明書を発行する医者を紹介され，外貨持出しが極端に抑えられていたため新橋の某所で闇ドル（1

ドル＝400円）を手に入れるなどのやり繰りをして，11月の出発に間に合わせた。セミナーへの参加登録は渡辺朗氏のもとでなされ，渡航申請は社会党書記長浅沼稲次郎名でされるということであった。

人選には若干の曲折があったようであるが，最終的に私と大学院文学研究科ドクター・コース在学中の民族社会学専攻の渡辺博史氏（後に流経大教授），東京教育大坂戸農場主任の飛田徳三助教授（東洋大大学院で農村社会学専攻）の3人に決まり，私と渡辺氏は米林先生からイスラエル行きの片道航空券を渡された。帰りのキップは後で送るということであった。

米林先生はこの3人を“東洋大学イスラエル調査団”と名づけられ，私をその団長に指名した。どこでそういうことに決まったのか，団の名称にしてもだれが認めているのかわからなかったが，プロモーターの米林先生の仰せなのでそのまま受けとめる他はなかった。先生はこの機会を東洋大におけるアジア・アフリカ研究開始の第一歩として大学派遣の形をとり，かねて構想の研究センター設置への実績づくりをされているのであろうと理解した。

こうして1958年11月15日，“調査団”は羽田発南回りパリ行きエール・フランス機でテルアビブに出発した。このころは現在のようにだれでも自由に海外に出られる時代ではなかったので，われわれの出発は朝日新聞の記事になった。途中バンコクから，社会党派遣の岡山県議・松本要氏が合流して計4人の日本グループが構成され，翌日夕方にロッド空港に到着した。

アジア・アフリカ17ヵ国の仲間に加わって

Afro-Asian Seminar を主催したのはイスラエル労働総同盟（Histadrut）で，イスラエル外務省，労働省，ヘブライ大学の共催であった。労働運動の国際的組織では社会民主党系の国際自由労連と共産党系の世界労連とが対抗していたが，イスラエル労働総同盟は前者に属し，その関係から日本社会党にセミナー参加の呼びかけがあったのである。社会党の松本氏を除く東洋大調査団3人は，最初ほとんどそうした政党的関係を意識していなかったのだが，イスラエルに着いてみると，受け入れ側では日本グループを一括して日本社会党派遣団として扱っていることが判った。

セミナーの会場はテルアビブ市内の宿泊施設をそなえたWorker's College of Histadrut（Beit Sefer Ha Histadrut）で，50年代の日本のまだ貧しい生活事情のところからやってきた目には，なかなか立派な施設に映った。

セミナーにはアジア・アフリカの17ヵ国（および地域）が参加した。日本，タイ，ビルマ，インド，セイロン，エチオピア，仏領スーダン，チャド，セネガル，ナイジェリア，ダホメー，ガーナ，象牙海岸，リベリア，ケニア，北ローデシア，南ローデシアである。アフリカの新興国が多いこと，アラブ諸国はイスラエルと敵対関係にあるので皆無，日本だけが近代化している国であることがすぐ気づかれるであろう

参加者数では，ナイジェリア，ガーナ，インドが10～11人派遣して目立っていたが，1人とか2人という国も多く，参加者は全体で60人であった。英，仏の旧植民地が大部分なので，使用語を英語グループとフランス語グループとに分けてセミナーが行われた。日本は全員英語グループに属した。

参加者は，セミナーの趣旨がcooperation（協同組合運動）の推進をめざすものであることから，協同組合の活動家，地域開発担当者，農政関係の役人が中心であった。われわれのように大学人が主なのは例外的なケースだった。

カリキュラムは，協同組合の理念，歴史，理論，イスラエルの現状等に関する講義，主な参加国の実情紹介（日本は松本氏が報告），協同組合村（キブツ，モシャブなど）での体験実習，協同組合経営による商工諸施設の見学などで，レベルも高く，密度の濃い内容であった。

ただわれわれには“東洋大学イスラエル調査団”の役割があるので，セミナーの合間を縫い，また実習や見学の機会を利用して，できる限り資料収集やイスラエルの事情調査につとめた。

私は「教育学」が専門であることを最初からセミナー当局に伝え，学校や成人教育の視察の機会をつくってもらった。渡辺氏は新移住者（帰国者）の統合と同化に関する社会学的調査に当り，飛田氏は農業機械化と水利事業の資料を集めた。

セミナーの終りには参加者全員にレポートが課されたが，私は「イスラエルにおける中等教育の諸問題について」というテーマの報告を提出した。後にA・A研1968年度研究年報に掲載された小論「イスラエル教育のナショナリズム——イスラエル・ナショナリズムにおけるZionismとJudaismの関係をめぐって——」は，そのときの調査にもとづいたものである。

得難い国際交流の経験から

＜国際局長バルカット氏の計らい＞

日本グループのうち松本，飛田両氏は往復航空券をはじめから所持していたが，私と院生渡辺氏の2人は片道キップでやってきていた。ところがセミナーが終了するころになっても帰国用の航空券が届かず，問い合わせには現地で何とか方法を講ずるようにとの返答がきただけであった。2人とも航空券を購入できる金（片道でも当時の私の給料の1年分以上にもなる高額運賃のころであった）を持ち合わせているはずもない。日本公使館に相談すると，手のひらを返すように冷淡な態度に変わり，まるで犯罪人を扱うように「強制送還」の措置をとると威嚇するだけであった。

やむを得ずセミナー当局に事情を話すと，3，4日経ってヒスタドルート（労働総同盟）本部から連絡があり，国際局長のバルカット氏（Reuven Barkatt）が会いたいとのことであった。同氏はリトアニア出身，小柄の50代の働き盛り，後に駐ノルウェー大使，イスラエル労働党（マパイ党）書記長を経て国会議長になった人である。セミナーの早い時期に，日本グループ4人がかれの私宅に招かれて一夕懇談したことがあったので，対面は初めてではなかった。

執務室に入ると，バルカット氏は立ったままですぐにこうのべた。「あなた方はセミナー終了後はヒスタドルートのゲストです。ご案内したいところもありますし，またご希望があればどんな所でも言ってください。2人分の帰国用航空券は私の方で用意しますので，これからの滞在計画に合わせてフライトの日程を決めましょう」と。

まったく予期しなかった破格の計らいに，私はただただ感謝の意を表するだけであった。バルカット氏は穏やかな笑顔でそれに応えながら「若いときにはだれでもお金がないものです」，そしてさらに「socialistはもともと楽天家ですからね」とつけ加えられたのには，本当に“穴があったら入りたい”気持であった。

松本氏は先に帰国していたが，わが東洋大調査団はそれからなお1週間ほど滞在し，ネゲブ砂漠を経て紅海への出口のアカバ湾の港エイラートまで車で案内してもらうなど厚遇を受け，出国当日はバルカット氏がお別れの夕食を共にされるという丁重な扱いであった。

＜アヨリンデさん父子＞

ナイジェリアのアヨリンデ（J. A. Ayorinde）さんは，グループ代表格で落着いた50代の農林省役人であった。日本に関心があり，私の部屋によくやってきた。名刺には英女王からM. B. E. の勲章を受けたと記されていて，イギリス植民地統治策の一端を見た思いがした。

アヨリンデさんは英文の本で賀川豊彦の著書を何冊か読んだといった。また鈴木大拙の本も読んでいて“Zen”（禅）に興味があるともいった。日本文化へのそうした興味を聞いていたので，私は帰国してから東山魁夷の画集セットをかれに贈った。

かれはヨルバ族の出で，つぎのようなヨルバの歌を教えてくれた。

ise agbe nise ile wa
eni ko sise, a ma jale
iwe kiko, laise oko, ati ada
koi peo! koi peo!

歌詞の意味は，若者に農業の大切さを訴え，本からではなく大地から学べ，ということだと

いう。

6年後の東京オリンピックの年に，アヨリンデさんの子息が来日した。かれも父同様に農林省の役人で，日本政府の対外技術援助計画により，茨城県内原で稲作技術の研修を受けにやってきたのだった。在日1年の間に，私は内原を訪ね，かれも私の家に来たり，またオリンピック会場のナイジェリア・チームのところに私が案内したりもした。かれは帰国に際して，英文リーダーズダイジェストの1年間講読契約をプレゼントしてくれた。

このようにアフリカンの父子2代と親しくなれたのも，やはり得難い経験といってよいであろう。イギリスで出版された分厚い "The History of the Yorubas" という本が後で送られてきたが，その中に記載されている19世紀後半のイバダンの首長 Ayorinde という人物が，いまのアヨリンデ家とつながりがあるのかもしれない。子息のアヨリンデさんはナイジェリア・ボーイスカウト連盟の総裁に就任したということが，ずっと後になって写真とともに知らされてきた。

ナイジェリアではヨルバ族とイボ族の激しい内戦がつづき，その混乱のためか父子の音信が絶えたままになったのが大変気がかりである。

文化比較の見方を教えられて

他にもインド・グループの好青年アプテ君（V. Apte）は，ボンベイ地方の農業改良普及員であったが，日本への帰途ぜひインドに寄るようにとすすめ，ニュー・デリーの空港で待ち受けてくれた。

お蔭で，デリーの見学，何ヵ処かの仏跡訪問，農村の協同組合活動の現地視察，アグラのタジ・マハール廟見物ができた。旧総督公邸であった大統領官邸を案内されたとき，広大なイギリス風庭園を見下ろす踊り場に，歴代インド総督（イギリス人）の肖像画が掲げられているのを指して，「これはインド人の寛容 Indian tolerance です」とアプテ君に解説されたことが忘れられない。われわれはインド大陸を列車で横断し，カルカッタから空路東京へ向かった。帰国したのは1959年3月7日であった。

思えば "東洋大学イスラエル調査団" の派遣は，私にとって始めての海外経験であり，異なる文化的背景をもつ人々との最初の接触であった。本を読んで知っているつもりの外国文化への理解とはまた違った角度からの，実感を伴う新たな認識が多く得られた。イスラエルのセミナーに17ヵ国のアジア・アフリカ諸国からの参加があったことは，文化比較のまたとないよい機会だったといってよいであろう。20代の終りのこうした鮮烈な体験は，私のその後の国際理解や判断に測り知れぬ影響を与えたといって過言ではない。

米林富男先生の「世界的視野に立った学問研究」という先駆的な発想が具体化してA・A研になったとき，私は1963年から研究員に加えられ，以来99年に退職するまで続いた。(注2) A・A研の共同研究計画「アジアの近代化と伝統」のテーマの下で，80年代には韓国，90年代には中国の社会教育現地調査を数回にわたって実施する機会も得た。

在職中に上述の「イスラエル教育のナショナリズム」（1968年度年報所収）の他に，「韓国社会教育法（1982年）の性格について」（1988年度年報所収）と，東洋大学特別研究の報告「中国における教育改革の進展」（『21世紀の国際社会における日本〔Ⅱ〕』1997年所収）をまとめることができたのはA・A研における研究の成果である。これらを振り返ると，いずれにおいても新たな国づくりと教育との関係が共通した大きなテーマであったことに，いまさらのように気づくのである。

注1　本稿のタイトルの「接点」には，イスラエルの地理的位置も意味されている。

注2　Afro-Asian Seminar の運営責任者（校長）であったエゲール（Akiva Eger）氏は，後にヒスタドルートのアジア・アフリカ研究所長に就任し，1964年5月，アジア諸国歴訪の際に来日し，東洋大学においてA・A研主催の「イスラエルにおける地域開発—キブツの構造と機能—」と題する講演を行った。